

SRID NEWSLETTER

No. 315 FEBRUARY 2002 国際開発研究者協会 創設者大来佐武郎

〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

2月号 内容 北タイでの事業展開の困難はITの遅れと・・・

谷口興二 (福岡国際大学教授)

いまなぜ再び「南南協力支援」なのか?

鈴鹿国際大学教授 武部 昇

好きな街、長崎について

国際協力事業団 青年海外協力隊事務局 辻岡政男

お知らせ

1. 新入会員 長谷川 信儀さん トヨタ自動車株式会社 アジア部企画室

会員異動 大野 泉さん 政策研究大学院大学

国際開発戦略研究プロジェクト担当

原 優治さん 明星大学

野中 邦高さん 自宅移転

2. 懇談会 2002年2月28日(木) JBIC 開発金融研究所にて

講師 前中国大使 谷野 作太郎氏 (現在 東芝顧問)

3. 第2回シンポジウム 2月23日(土) 一橋大学学術総合センターにて

4. 幹事会 2002年3月12日(火) JBICにて

北タイでの事業展開の困難はITの遅れと・・・

谷口興二（福岡国際大学教授）

皆さんもご経験がお有りかも知れません。途上国へ行き、それも同一地点というか、同一の村に何度も足を運び、また長期に滞在することになりますと、そこを訪れる理由（事業や、課題）以外の面でも村人から相談されることがあります。本文で取り上げる北タイの人々の例もその一つです。本文では、小生が最近遭遇した相談事についての現在までの顛末を述べて、開発問題を考える材料を読者の皆さんに提供したいと思います。以下の顛末になった原因は無論こちら（小生）側にもあるわけですが皆さんはどのように御覧になりますか。

話の発端は、小生が1993年以来度々訪れている北タイのチェンラーイ県クンターン郡の村で、一昨年(2000年)の6月滞在先の家の真向かいに住む前村長ユーンさんの家の塀際にビニール袋に入れて無造作に置いてあったのを見つけた木炭です。

「この炭は日本で売れないだろうか」というのです。販路については小生は全くの素人ですので、結果的に専門商社の人を紹介しました。一方、製造関係では、原料や製法、環境問題はどうなっているのか。これも問題はない。この炭の原料は彼らがマイヤラップヤックと呼んでいる多年生の草（藪を形成しているが、灌木か？）であること、この草（灌木）がここ数年に非常な勢いで増え、生命力が強いというか、どのような土質の土地にも生えること、田地畑地に食い込んで耕作を阻害して困っていること、若葉が出てから1年程で直径が5cmから10cmほどに成長するので、それを炭に焼いていること、草（灌木）の高さは1年後には1m半から2mになっていること、炭の性質は火力が強いが直ぐに衰えること（細い幹（茎）のせいではないか）、等が分かっていました。さて、販売するとなると、一定以上の量を確保して、継続的に供給し続けることが大切だと思います。炭の品質は良いと言えないようだが、それは価格を下げることで対応して何とか需要に結びつけることが出来ましょう。ではユーンさんの村の炭の製造販売を輸出ベースに乗せることはできるのか。これは簡単ではありません。

タイでは木炭は農業農協省木炭課の管轄です。タイ政府はユーカリその他の樹木から造る炭の輸出は奨励していますが、マイヤラップヤックを炭にすることまでは考え及ばなかったようです。しかし、日本に輸出するとなると、早速この点が問題になりました。一介の村長であるユーンさんにはとてもこの課に対してマイヤラー

プヤック炭の輸出許可を申請することは出来ません。今日、同省政策執行の基準となっている法律の付属品目リストにマイヤラープヤック炭を追加する案が(01年6月)国会に提出されたことまで分かっています。品質・量、製造原価、あるいは担当役所の許可もさることながら、もっと大きい困難は生産者(供給者)の組織が確実なものではないことです。ユーンさん達の炭製造事業はチェンラーイ県に駐在する内務省農村開発促進事務所(RoPhoCho)の支援を受け、統率されています。しかし、ユーンさん宅もRoPhoCho事務所も炭の販売・輸出業者の本社事務所にするには不向きです。ユーンさん宅には電話しかなくEメールやFAXは使えない、RoPhoChoチェンラーイ事務所もFAXが事務所全体で1台しかない、等のIT設備の不備もありますが、そのFAXにしても事業のためのやり取りをするには使えない、というのは英語を解し使える人がそこに居ないから、などの理由によります。

そうこうする内に、ユーンさんも嫌気がさしてきたのでしょう、顔を合わせても炭の事を言い出さなくなりました。彼ら北タイの人のみならず、タイの人々はご承知の通り、これらのこまごまとした支障のあることに対してそれをこつこつと解消して行くということが好きでは有りません。いわば、タイの価値の一つであるサヌックの対極にあるからだ、とも言えるでしょう。このことこそが事業展開上の困難ということになりましょうか。

いまなぜ再び「南南協力支援」なのか？

鈴鹿国際大学教授 武部 昇

いまから3年程前のSRID NEWSLETTER (NO.273, 1997年12月)に、私は「南南協力の新しい展開と南南協力支援の意義」と題する小論を寄稿したことがあり、本論は、いわばその続編である(注1)。1960年代から90年代までの南南協力とその支援の流れは、21世紀初頭の現在どのような特徴を持つものとして把握できるのであろうか

南南協力—この魅力ある響きをもつ国際協力の一側面は、第2次大戦後の世界における途上国のナショナリズムの表現として国連の場を中心としてその経済的側面(ECDC)と技術的側面(TCDC)が検討され、様々な活動が進められて来た。今日における南南協力支援の大きな課題は、グローバル化の進展により南—北諸国間、南—南諸国間の経済格差が拡大し、新たな南北対立の兆候が見えると

いう世界的潮流の中で、取り残されていく危機感を持つ後進途上国にどのように協力の手法を築き上げて行くかであろう。そのためには現時点での概念整理が必要であり、たとえば以下のコンポーネントと概念の検討が重要となる。

まず基本的な理念としては、南南協力支援はグローバル・パートナーシップの観点からもっと重視されてよいと考えられる。すなわち、先進国と途上国は発展のパートナーであり、先進国、先進途上国は全地球的視点から後進途上国のその存在と発展に対する責任を有する、との位置づけである。その根底にある思想は、後進途上国の発展なくしては人類の持続的発展が達成できないという危機感である。また、南南協力支援は人類の持続的発展を確保するための地球公共財を提供するという目的から捉えることができる。

持続的発展を確保するには途上国の総合的な開発戦略が必要である。そのためには従来型の ECDC、TCDC のみでなく、対象分野の多様化、多層化が必要である。すなわち政治、経済、社会、文化、環境の面における課題と取り組むことも必要とされる。さらに、特に近年、参加型開発が重視され地方自治体・民間企業・NGO など様々なアクターの参加が必要とされることから、南南協力およびその支援を成功させるためには、支援対象プロジェクトの選定でもこの面での配慮が必要とされる。

南南協力支援には多様化した対象分野、多様化されたアクター、対象地域の拡がり方の組み合わせにより様々な協力形態を考えることが可能である。また、プロジェクト・レベル、プログラム・レベルでの協力形態も可能である。そして、情報技術が発展がもたらす情報格差（デジタル・デバイド）に対応するには特別の配慮が必要である。

上に見て来たように、南南協力とその支援のスキームは、現在、きわめて多面的、重層的な展開を必要としているといえよう。かつて大来佐武郎氏が、国際開発学会の学会誌創刊号において指摘したように、日本は「南北に橋をかけるグローバルな構想を持たねばならない」のであり、その構想の中で TCDC と ECDC を含む南南協力支援を、国連諸機関との連携のもとに一層進展させていくことが、グローバリゼーションが急速度で進展する今ほど必要とされている時はない、と私は考える。

注1) なぜ再びこのテーマかといえば、私は、このほど新論文「ラテンアメリカにおける南南協力の進展とその課題」（「鈴鹿国際大学紀要」2002年3月刊予定）を発表するのを契機に、この新論文を踏まえて、南南協力支援に関する問題提起と提言を行いたい、と考えるからである（この新論文を必要とされる方はメール（!! [HYPERLINK "mailto:YHY10427@nifty.com" ¶ \[YHY10427@nifty.com\]\(mailto:YHY10427@nifty.com\)](mailto:YHY10427@nifty.com)）にて送

付先を御連絡下さい。3月末に郵送します。)

皆様からの議論を期待します。

好きな街、長崎について

国際協力事業団 青年海外協力隊事務局 辻岡政男

年末に久しぶりに長崎を訪ねた。出島のオランダ商館の建物が一部復元されていて、歩くと、シーボルトやグラバーさんらに出会いそうな気がする。長崎には、オランダや中国との交流を物語る名所旧跡が多い。長崎の風景、特に両側を低い山並みに囲まれた静かな湾の美しさについては、幕末から明治にかけて、船で長崎を訪れた西洋人の旅行記の中でしばしば紹介されている。今、両岸に造船所や住宅が密集してきた感があるが、なお全体として景観の美しさを保っている。日本の国際交流の歴史と今後のあり方を考える材料がすべてそろっているような気がして、長崎を歩くのが好きだ。本稿では、長崎の友人のことを書きたい。

私が最初に長崎に来たのは、まだ学生時代の1969年の春で、大きなリュックサックを背負って一ヶ月間、韓国をグルリと旅をした帰途になる。その頃は日韓国交回復の直後だったので、まだ韓国を旅する日本人も少なく、韓国の人たちから「戦後初めて会う日本人だ」とか珍しがられて、あちこちで親切にしてもらった。

ソウルで一週間ホームステイさせてもらった韓国の家庭のご主人、河炳國さんから、「日本に帰ったらこの手紙を長崎の人に届けて下さい」と頼まれた。「宛先の人は自分の小学校（大邱市国民学校）時代の恩師です。教え方は大変厳しかったのですが、日本人と韓国人とに分け隔てせずに接して下さり、とてもいい先生でした。自分がかんばって医者になれたのも先生が励まして下さったおかげです。ぜひ連絡をとりたいたと思っています」とのことだった。河さんの小学校時代は、韓国が日本の植民地下に置かれていて、韓国の人々にとっては大変な苦難の時代であった。

その手紙のあて先を訪ねると、当時、長崎市社会教育課長の山口さんであった。市役所を訪問した時、山口さんは50歳くらいのお年だったろうかと思う。長身で背筋がピシッと伸びていて、そして相手をきちんと見て優しく話される姿が大変印象に残っている。なるほど、先生と慕われる人だと思った。山口さんは長崎県五島の出身である。

その時、山口さんから新しい友人として福田さんを紹介してもらった。福田さん

は当時20歳を過ぎたばかりで、長崎市の青年団のリーダーをしていた。福田さんとはそれ以来30年以上懇意な間柄で、今回の旅でもお世話になった。今、福田さんは50歳を越えるが、事業を行うかたわら、現在、長崎大学経済学部の大学生である。長崎滞在中の一夜、福田さんが友人を17名も集めてホームパーティを開いてくれた。集まった顔ぶれは、韓国が好きで18回も旅行した女性、オーストラリアを自転車で横断した男性、青年海外協力隊員でセネガルに行った男性、市内で留学生に日本語を教えている女性、大学の同級生など、皆、人生経験の豊富な人たちである。それぞれ自分の専門分野をしっかりとった人たちで、互いの知識と経験を交流させあいながら学びあっているという印象を受けた。めいめい、料理か飲み物を少しずつ持ち寄ってパーティに参加するところなど、集まり方が外国的である。席で聞くと、「おくんち祭りが町内ごとの運営だから、長崎の土地の衆は、祭りを通して地域の集まりの楽しみ方を知っている」と一人が説明してくれた。

話が弾んで、すぐ深夜になってしまった。私は、午前1時に、「お先に」と言って、ホテルに引き上げた。長崎に来ると、時々こういう楽しい会合に交えてもらえるのだが、若い人たちがこうした社交慣れをしているのは、歴史として常に窓を外に開いていたこの長崎の土地柄かと考えたりしている。私にとって、学生時代の韓国旅行が長崎とのご縁の始まりであったことをふりかえてみると、これもひとつの長崎の街の国際性のおかげかなと感じている。